

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Toward a semantics of English prepositions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 四郎, Wada, Shiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/620

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



前置詞意味論序説

和田 四郎

1 はじめに

前置詞という品詞は一般的に認められている語類にもかかわらず全体として一定の特性を示すわけでもなく、前置詞と見なされるそれぞれの語も一様ではない。形態的にも *in*, *on*, *at* 等単音節の語から, *above*, *below*, *over*, *under*, *underneath*, *notwithstanding* など2音節, 3音節, 4音節の語などがあり, また, *as for*, *as to*, *because of* など2語のもの, *in case of*, *in line with*, *on account of* など3語からなる語群も前置詞として分類される。

また意味的にも多様性を極める。前置詞は「場所」や「時間」等を表すとされるが、それが必ずしもすべての前置詞を特徴づけるわけではない。確かに代表的といえる *in*, *on*, *at* などの前置詞は「場所」や「時間」を表すことはあるが, *for*, *since* などが「場所」を表すことはなく, *but*, *off*, *down* などは「時間」を表さない。前置詞はその他「理由」(*for this reason*)「原因」(*die from*)「目的」(*for the purpose of*)「結果」(*in vain*)などを表す場合もある。しかし、このことから *for* の「意味」が「理由」や「目的」であり, *from* のそれが「原因」, *in* が「結果」と断定することはできない。まして、これら「場所」「時間」「理由」「原因」「目的」「結果」などの概念を包括的にまとめる上位概念が存在する可能性も少ない。

さらに機能的な側面もみてみよう。前置詞は後続する名詞とともにその他の要素を修飾する機能を持つが、前置詞句は他の要素を修飾するためにのみ

存在しているわけではない。例えば *Look at the tree* における *at the tree* や *from behind the curtain* の *behind the curtain* などがそれぞれ動詞 *look* や前置詞 *from* を修飾しているとはいえない。

このように、形態的にも意味的にも、そして機能的にも多種多様な語及び語句が「前置詞」として認知されている。これらのことがこの語類そのものの否定に直結することにはならないとしても、前置詞のこのような混沌とした振る舞いは、当然行われてしかるべき統語的及び意味的あるいはその他のさまざまな観点からの分析が不十分であることの証左であるとも考えられる。前置詞に関する文献が決して少なくはないことを見るとこれは一見奇妙なことに思われるが、そのほとんどにおいて前置詞について明確な概念規定が行われないままに議論がなされていると言っても過言ではない。本稿での第一義的な目的はこの一見混沌状態にある前置詞群を語源の観点から見直し、整理することにある。そして第二に、その結果抽出された最も基本的な前置詞が提示する意味的特性を考察することである。

2 前置詞の定義

2.1 概観

前置詞全体に対する定義は上述のように困難を極めるのであるが、それを象徴的に物語るのが Quirk *et al.* (1985: 568-9) の次の記述である。

- (1) Prepositions cannot have as a complement: (i) a *that*-clause, (ii) an infinitive clause, and (iii) a subjective case form of a personal pronoun.

このような否定的な捉え方は厳密な意味における定義とは言えないが、ここに Quirk *et al.* の苦悩を読みとるには十分であろう。ところが前置詞の

振る舞いはこのような規定からも自由である。すなわち、次の(2a, b)のように *that* 節を後続させる前置詞も、動詞の不定詞の前に生ずる前置詞も存在し、また(iii)の捉え方にしても例外は存在する。この(iii)の背後には、前置詞に後続する要素は名詞であり、その名詞の格は目的格である、という伝統的あるいは規範的な前提があると思われるが、後続する要素は名詞とは限らず、(2c)のように形容詞や副詞の場合もめずらしくはない。

- (2) a. As far as health goes, we have done pretty well, discounting the minor trials of age, and we are lucky *in* that they are minor. —BNC
- b. I managed *to* solve the problem.
- c. *as* usual, *in* vain, *for* long, (take it) *for* granted, *for* certain, *for* free, *for* real, *for* once, *until* recently, *etc.*

これらの事例が限定的・個別的な例外であるとも考えることも一つの方策ではあるが、問題は「例外」の根拠として「前置詞は名詞を支配する」という前提があり、これが現在の前置詞論にほぼ共通にみられるということである。かつて前置詞は確かに後続の名詞に対して特定の格語尾を要求し、その意味において名詞を支配していた。つまり、前置詞とその目的語としての名詞の隣接関係は格変化語尾という明示的な形で原理的に保証されていたのである。しかしながら、格変化語尾などがほぼ失われた現代英語でそのような明示的な手がかりが存在しない以上、前置詞とその目的語の結合原理は別に求められる必要がある。本稿でこの原理的理論的問題を詳しく考察する余地はないが、前置詞が形容詞などを後続させるという現象をみても前置詞本来の形態的格付与能力は失われていると考えるべきであろう。¹

1 現代の言語理論において前提とされている格付与あるいは意味役割(θ -role)付与の問題は再検討の余地があるであろう。唯一の形態的特徴は人称代名詞における *he* と *him* などの対立である。ところが現代英語においては *It's him* のようにかつて主格が要求されていた位置に *him* という「目的格」が表れるなど、目的格の人称代名詞はもはや無標(の格)と見なすべきであろう。その他、格付与の問題については Rauh (1991)などを参照。

前置詞に対する上述のような否定的な規定の一方で、積極的に前置詞の機能を認める立場が同じQuirk et al. (1985) で以下のように表明されている。

- (3) In the most general terms, a preposition expresses a relation *between two entities*, one being that represented by the prepositional complement, the other by another part of the sentence.
(イタリック体筆者) —Quirk et al. 1985: 657

この(3)は前置詞に対して一般的に認知されている見解として代表的なものであるが、これも前置詞全体に一般化することはできない。次例をみよう。

- (4) a. *Across the street* is swarming with bees. —Jaworska 1986
b. *Under the sink* stinks.
c. *Between six and seven* is OK.
d. He appeared from *behind the curtain*.

(3)の定義は、前置詞にはそれによって関係づけられるべき要素が二つ必要であるということを述べている。しかし、(4)から明らかなように(a)-(c)の前置詞句は主語として、(d)では *behind the curtain* が前置詞 *from* の目的語としてそれぞれ用いられており、これらの前置詞句は独立している。すなわち関係づけられるべきもう一つの要素を持たないことになる。(3)では「最も一般的には」と断っていることから、これらも例外とみなされることになるが、*He stayed in London* における *in London* は動詞の必須項であり、*Look at the tree* のような前置詞動詞における前置詞句も動詞を修飾する（つまり関係づけられる）と考えることは困難であろう。このような一般的な表現を例外として片付けることは不自然であり避けなければならない。

しかし、(3)においてもっとも重要な問題は「関係」という概念があまりにも漠然としていることである。一般論からみても、文が構造体である限り、

その構成要素は互いに何らかの「関係」で結合され、さらに大きな構造体を形成していることは明白であり、「関係」が前置詞のみに特有の現象ではない。問われるべきはその関係の実質的な中身の問題である。

前置詞は巨視的にみてその範疇の存在を否定することはできないが、微視的に見るならば以上のように種々の問題を内包する品詞である。従来の前置詞論の根本的な問題はこの二つの視点を明確に区別せず、いわばすべての前置詞を同じ土俵の上で考察してきたことにあるといっても過言ではない。この点は特に近年の認知主義的なアプローチについても顕著に見られる。例えば Rauh (1991), Zelinsky-Wibbelt (1993), Putz and Dirven (1996), Tyler and Evans (2003)などは、さすがに3語から成る前置詞を論ずることは避けているとはいっても、*in*, *on* など単音節の前置詞はもとより、*over* や *along* など2音節の前置詞をほとんど区別することなく、いわば無差別に論じ、しかも取り上げられている前置詞の選択も恣意的である。

前置詞が「閉ざされた類 (Closed Class)」に属するか「開かれた類 (Open Class)」に属するか問題も決着はついていない²。一方で、*considering* や *given* などのように前置詞としての機能確立した語が新しく生まれ、既に廃語となった前置詞もあることから、前置詞は「開かれた類 (Open Class)」に属すると考えることもできないわけではないが、他方では、前置詞は「閉ざされた類」に含まれるという認識を我々は強く持つ。しかし、「閉ざされた類」ということはその類に属する成員は余すところなくリストに作ることができることを意味するが、それはどのようなものか、そして、その根拠は何か、このような根本的な問題については記述的文法も理論的文法も明確な解答を与えてはいない。それは上述の Quirk *et al.* からも明らかであろう。

2 語彙（あるいは言語の基本的な単位）に「閉ざされた類」と「開かれた類 (Open Class)」の二つの種類が（おそらく言語普遍的に）存在することは重要である。Talmy (2000) を参照されたい。

3 単音節前置詞の特質

前置詞が「閉ざされた類 (Closed Class)」に属するという場合、何よりも一語の前置詞を想定していると思われる。事実、このような一語の前置詞は、上で言及した *considering* や *given* といった「例外」はあるものの、その成員にそれほど出入りがあるわけではなく、ある程度固定していると考えてよい。まして一音節から成る前置詞はリストとして列挙することはそれほど困難なことではない。例えば Quirk *et al.* (1985:665-6) は次を例示している。

- (5) *as, at, but, by, down, for, from, in, like, near (to), of, off, on, out, past, per, pro, qua, re, round, sans, since, than, through, till, to, up, via, with*

上のリストに新しく付け加えるべきものも前置詞としての機能を示さないものも、おそらく、ないであろう。しかし、これらの単音節の前置詞は語源的には次の二種類に分類することができる。

- (6) a. *at, by, for, from, in, of, on, to, with*
 b. *as, but, down, like, near (to), off, out, past, per, pro, qua, re, round, sans, since, than, through, till, up, via*

OED によれば、(6a) に含まれる前置詞は語源が OE に由来するのに対して、(6b) の類は語源的には次のいくつかのタイプがあることがわかる。

- (7) a. 複合語的な構成要素を持つもの : *as, but, since*
 b. 他品詞に由来するもの : *down, like, near(to), out, past, than, till, up*

- c. 他言語から借用したもの : *per, pro, qua, re, round, sans, via*
- d. その他 : *off, through*

まず(7a)から見てみよう。*As*はOE時代の *all-swá* に由来し、本来は2語からなる。その意味は‘wholly so, quite so, just so’という指示詞的な語である。従って、これは(7b)に含めることも可能である。*But*はOEでは *be-útan, bútan, búta* などの形式であるが、注意すべきは語頭の *be* が前置詞 *by* に相当しているということである。従って *but* は語源的には現代英語の *by means of, by virtue of, by way of* のような複合的な前置詞と考えることができる。意味は‘on the outside, without’である。最後の *since* も語源的にはいくつかの要素によって形成されている。Wyld によれば、この形は OE *sið+ðan+s* ‘late+that+s’ という3つの要素から成るものである³。語尾の *-s* はいわゆる副詞的属格 (adverbial genitive) と呼ばれ、*besides, always* などに見られる *s* と同類である。

次に(7b)に移る。*Down* は副詞 *dúne, dún* に由来するが、このもとの形は *adúne* であり、これは‘off the hill or height’を意味する。つまり名詞を基体としている複合語であるということができる。*Like* は語源は形容詞あるいは副詞であり（ちなみにOEDは *like* に前置詞という範疇を与えてはいない）、*near* は副詞 *néah* の比較級形 *néar* に由来する。*Past* は動詞 *pass* の過去分詞形（OEDでは‘perfect tense’と呼ぶ）、*than* のOE形は *panne, ponne, panne* であり、*then* と同じ語つまり時間を表す副詞ということになる。*Till* はOEでは‘fixed point, station’などを表す名詞であり、*up* は副詞からの転用である。

(7c)では、OF借用の *sans* を除けばすべてラテン語から借用されたものである。

最後に(7d)の *off* と *through* をみよう。これらの語は純粹のOE起源であり、合成語でもない。しかし *off* は知られているようにOEの *of* に由来

3 Henry Cecil Wyld ed. *The Universal English Dictionary* (1961)参照。

し、OED によれば *off* という形で使われ始めたのは13~14世紀頃であると思われ、それはしかも副詞としての用法であった。前置詞として用いられ始めたのは17世紀以降のことである。従って前置詞としての *off* は副詞からの転用と考えてよいであろう。*Through* は OE でも *ðurh*, *purh* として前置詞であった。しかしこの語で興味深いのは、類語として「穴」を表す *thirl* を持ち、OED によればゴート語、古高ゲルマン語に遡ることができることである。すなわち、*through* は名詞あるいは動詞と関連する可能性が考えられるということになる。

以上を結論的に述べるならば(6b)の前置詞は、(i)語源的に前置詞以外の語との関連が密接にあること、(ii)外来語からの借用という2点にまとめることができる。すなわち語源的な観点からみると(6b)はOEからの前置詞とみなすことはできないということになる。従って(6a)の前置詞（ここでは中核前置詞と呼ぶ）が文法的に重要な機能を果たすと同時に意味的に明確さを欠くのに対して、(6b)の前置詞の表す意味が具体的かつ一義的で明確であるという相違と関連する。また、これは(6b)の前置詞句が文構造において付加詞(Adjunct)として用いられるものが多いという事実とも関連するであろう。

さて(6a)の中核前置詞は統語的にも重要な働きをするが、ここでは意味的な側面に焦点を絞り、それぞれの特性を考察したい。⁴

4 意味的な特性

4.1 中核前置詞の意味特性

すでに述べたが、これまでの前置詞に関する研究は、統語的および意味的アプローチを問わず、(6a)のような中核前置詞とその他の前置詞を全く区別することなく行われてきた。その当然の帰結として、中核前置詞が示す種々

4 統語的な特性についてはWada(to appear)を参照されたい。

の特性は見落とされることとなる。さらに、これらの前置詞は以下のような意味的な点でも他の前置詞とは著しく異なる。

前置詞に対するもっとも一般的な考え方は、すべての前置詞にはそれぞれ特定の中核的意味があるという想定である。そしてその中核的な意味が様々な方式で拡張し、多様な意味を持つという説明がなされてきた。すでに挙げた文献はほとんどがその前提に立つものであるが、ここではその典型をDirven (1993) にみてみよう。彼は前置詞の意味は前置詞が固有に有する中核的意味から time, state, area, means/manner, circumstance, cause/reason へ拡張するという前提に立つ。しかし、そこでも扱われている前置詞は、単音節前置詞ばかりではなく、*about*, *over* など多音節の前置詞及び *out of* といった2語の前置詞も含まれ、より重要なことには *to*, *for*, *of* は考察の対象とはしていないなど恣意的な印象は拭えない。ところが中核前置詞に着目するとある意味的な特性が浮かび上がってくる。以下の(11)はDirvenが提示する表に *to*, *for*, *of* を付け加えたものである(*印は筆者による追加)。

(8)の表で注目されることがいくつかある。まず、第一に *at*, *on*, *in* が time, state, area などすべての意味拡張を示すということ⁵、第二は、*for*,

(8)	time	state	area	means manner	circum- stance	cause reason
<i>at</i>	+	+	+	+	+	+
<i>on</i>	+	+	+	+	+	+
<i>in</i>	+	+	+	+	+	+
<i>*for</i>	+	—	—	—	—	+
<i>from</i>	+	—	—	—	—	+
<i>by</i>	+	—	+	+	+	+
<i>*to</i>	—	—	—	—	—	+
<i>*of</i>	—	—	—	—	—	+
<i>with</i>	—	—	+	+	+	+

—Based on Dirven (1993)

5 もっとも注目すべき点は表中の前置詞すべてが cause/reason という拡張的意味用法を持つということである。Dirven には細部に関して検討すべき問題も少なくないが、もしこれが正

from, *by* は *time* を意味拡張として共有するのに対して, *to*, *of*, *with* にはそれがないこと, 第三に *by* には *time* の意味拡張がみられ, *with* にはそれがみられないが, この両者はそれ以外の点では区別がないことである。仮にこれらの前置詞を以下のように分類し, 以下でその根拠を述べよう。

- (9) a. *at*, *on*, *in*
 b. *for*, *from*, *by*
 c. *to*, *of*, *with*

まず(9a)とそれ以外の前置詞との相違は明白であろう。前置詞(9a)の *at*, *on*, *in* が *time*, *state*, *area* などすべての意味拡張を示すのに対して, (9b, c) にはそのような拡張がみられない。意味拡張とは, その字義通りの意味からして, 中心的な意味を持つ語にのみ限られた現象であると考えるべきであろうから, この相違は, (9a)の前置詞は何らかの意味を持つのに対して, 意味拡張を示さない(9b, c)はそもそも拡張すべき意味そのものが欠如していることを示唆している。それではこの「何らかの意味」とはいかなるものであろうか。

4.2 場所的前置詞 *at*, *on*, *in*

前置詞 *at*, *on*, *in* が何らかの意味があるということの証拠として, これらの前置詞が後続する目的語に対して一定の意味的な制約を課すことを挙げることができる。例えば次例では他の前置詞を用いることはできない。

- (10) a. *at* six o'clock/(to shoot) *at* the deer/(He is) *at* lunch, etc.
 b. (hanging) *on* the wall/(to park) *on* the road/*on* the day,
 etc.

↘しいとすればきわめて重要な意味を持つ。しかし以下の議論ではこの拡張的意味は考慮の対象とはしない。

- c. *in* the year/(to speak) *in* English/(to swim) *in* the river,
etc.

しかし *at*, *on*, *in* にはその他に注目すべき特性がある。ここで今次のようなフレーム文に入る前置詞を考えてみよう。

- (11) X is { } Y.

例えば *above*, *behind* などの多音節の前置詞の場合、次例のようにその意味は文字通りの場所的な意味を表す。

- (12) a. The water level was *above* the ground. —BNC
b. What he said was quite *above* me. —CIDE

上の(b)は一見比喩的な印象を与えるが、*above* 自体の意味が比喩的に用いられているわけではなく、意味は文字通りの「～の上」であり、抽象的であるとはいえ位置的な関係を表していることには変わりがない。

同様のことは *over* についてもいえる。Quirk *et al.* (1985:685) は *over* の8つの意味 (senses) について言及している。

- (13) a. POSITION: A lamp hung *over* the door.
b. DESTINATION: They threw a blanket *over* her.
c. PASSAGE: They climbed *over* the wall.
d. ORIENTATION: They live *over* the road. ['on the far side of']
e. RESULTATIVE: At last we were *over* the crest of the hill.
f. PERVASIVE [STATIC]: Leaves lay thick (all) *over* the ground.
g. PERVASIVE [MOTION]: They splashed water (all) *over* me.

- h. ACCOMPANYING CIRCUMSTANCES: We discussed it *over a glass of wine*.

しかし, Quirk が言うところの sense はここでは「用法」と同義である解釈すべきである。たとえば上の 'POSITION' 'DESTINATION' 'PASSAGE' などの「意味」は動詞と密接に関連する意味であり, *over* が独自に持つ意味とはいえない。端的に言えば *over* はある対象の上方空間に対して与えられた名称であり, その基本語義自体が転化しているわけではない。

これに対して, *at*, *on*, *in* は (10) のような通常の場所的あるいは時間的な意味を表すほか, 次の (14) のような用法がある。

- (14) a. I was *at* school.
 b. Bob is *on* holiday.
 c. He was *in* hospital.

重要なことは, (14) は単なる位置的な関係を述べているのではなく, 主語の特質あるいは属性を述べていることである。その点が, 多音節の前置詞はもとより, 後に触れる *to*, *of*, *with* などの前置詞との本質的な相違といってもよい。

これまでの多くの前置詞論は中核的意味からの比喩的発展あるいは意味拡張を前提として議論されている。例えば Dirven も *at* の中核的意味を “point as spatial entity”, *on* のそれを “contact with line/surface”, *in* については “spatial enclosure” と考える。しかし, これらの中核的意味と上の (14) の文を関連づける意味的拡張とはどのようなものなのであろうか。まず (14a) の *at* を考えてみよう。注意したいことは, *at the school* と *at school* との相違は, 明らかなように, 冠詞 *the* の有無である。従って, *at the school* が単純な場所を表し, *at school* が主語の特質あるいは状態を表すという相違は *the* の有無に起因することであり, *at* 自体の意味的な拡張

に原因があるわけではないという想定は自然である。また(b)の *on* の用法が“contact”からの「発展」と考えることはまず不可能である。(c)の *in* では、*at* と同様に後続名詞の冠詞の有無が拡張に深く関連していることは明らかであるが、この *in* についても中核的な意味“enclosure”からの意味的拡張をあえて想定する必要があるか否かという点についての疑問は残る。⁶ 確かに *in hospital* は“enclosure”そのものであると考えられるが、*a girl in glasses*, *a man in running shoes* などを“enclosure”と見なすことは無理であろうし、たとえば *The sheep is in lamb* における *in lamb* などをもどのように考えるのかなど問題は多い。⁷ そもそも比喩的な発展という概念は多義性を説明する装置と考えられ、言い換えるならば前置詞が多くの意味を獲得していることを前提としているに他ならない。しかし *at*, *on*, *in* といった前置詞がそれほど多くの意味を獲得しているとは考えにくいのである。たとえば *ax* が「オノ」という名詞から動詞に使用され、しかも「削減する」という意味に用いられる場合はこの語自体が意味的拡張を起こし、多義的であるといえるが、同様の議論をこれらの前置詞について論ずることは適当ではない。問題は設定された中核的な意味そのものにあると言ってよい。

4.3 場所的意味とは

なぜ(14)が主語の特性あるいは属性を述べるのであろうか。いわゆる場所的な表現との差はどこにあるのであろうか。この点を考える上で参考になるのが Herskovits (1986) である。Herskovits は次のように述べる。

- (15) ‘Since it is not the objects themselves that we relate by means of a spatial expression, but regions of space associated with the objects at a given time, an element of the domain of a geometric description function is a pair consisting of an object

6 詳細は Dirven (1993) を参照されたい。

7 これらは<形> (あるいは<姿>) のイメージである。詳しくは和田 (2005) を参照。

and a time.'

—Herskovits 1986: 57

上の引用からも明らかなように、Herskovits は場所的な概念について、位置づけられるモノ（すなわち Trajector）と参照点となるモノ（すなわち Landmark）とが直接的に関係を持つのではなく、それぞれの一部（あるいは全体）が互いに特定の位置関係にあるときに成立すると考える。

ある物体が時間・空間上に存在する時、その物体の幾何学的形状（及びその他の条件）に応じてその物体と密接に関連する場所的な概念が生じ、それが参照点の場所的な概念との間に特定の関係を持つことになる。具体的に述べると、*the cat on the grass* では、*cat* の具体的な場所的な概念とはこの場合は猫の足あるいは腹部などといった身体の一部である。一方 *grass* についても同様に考えることができる。当然 *grass* それ自体はモノであるが、この場合の場所として関連する概念とは *grass* そのものではなく、その＜表面＞ということになる。この場合の「(猫の) 一部」と「(芝生の) 表面」などはそれぞれ全体が前提として存在するわけであるから、場所的な認識にはいわゆる「全体」の中の「部分」が密接に関連していることになる。このように場所的な概念とは単なるモノとモノとの位置関係ではなく、それぞれのモノの属性とでも言うべき密接に関連する部分的概念の相互関係と考えることができる。

ところがこの部分としての概念は実は単に場所的な認識にとどまらない。例えば、次をみてみよう。

- (16) a. He looked at the tree.
 b. He looked behind the tree
 c. He looked in the bag.

一般に *He looked at the tree* では視線の対象は *the tree* であると考えられている。しかし、*He looked behind the tree* における視線の対象は

the tree ではなくその背後 (*behind*) である。すなわちここでは前置詞句の目的語名詞は単なる参照点として機能し、視線の対象はその参照点の部分としての前置詞自体であり、ここでは場所的意味をもつとは考えられない。

(a)で視線の対象が *at* ではなく *the tree* であるのは *at* の意味的特性による (脚注9 参照)。このような現象は上で述べた多音節の前置詞に特に顕著に観察されるが、*He looked in the bag* のように単音節の前置詞も例外ではない。この場合の対象が鞆そのものではなくその内部であることは明らかであろう。冒頭で触れた前置詞句が主語あるいは目的語として機能する例文 (4) も前置詞が持つ部分としての意味がモノとして機能していると考えることができる。

4.4 モノと様態

今一つ注意したいことがある。Dirvenが、*at* の中核的意味を “point as place”, *on* を “contact with line/surface”, そして *in* のそれは “spatial enclosure” と考えていることは既に述べた。このような記述はおそらくこれらの前置詞に対するごく一般的な考え方でもあるが、これには基本的に重大な誤りがあるといわざるをえない。なぜならば *at* の「点 ‘point’」と *on* および *in* の「～に接して ‘contact’」「包含 ‘enclosure’」という概念は質的には異なる種類の意味と考えられるからである⁸。前置詞 *on* では<表面>がモノとしての意味であることは上で述べた。また *in* については<形>が基本的な意味と考えられることが和田(2005)で論じられ、*at* についてのそれはおそらく<点>ではないかと考えられる⁹。これに対して *on* の「(～に)

8 Herskovits は議論の対象を *at*, *on*, *in* に限定しているという点で評価できるが、*on* の意味として「接触」という様態的概念を導入する点で問題であろう。

9 「点」をモノとして捉えることには無理があると思われるかもしれない。すなわち、部分と全体という観点から見るとき、「点」が全体の「部分」であると考えすることは困難であるからである。Wierzbicka (1993) は例えば *at ten o'clock* における *at* は「(目的語として後続する名詞で表わされる) 時と同じ時間を表わす」と述べている。これは前置詞 *at* は意味的には「空」であるということに等しい。言い換えると「点」とはまさにそれを構成する部分が存在しない抽象的な概念・意味に他ならない。

接して」, *in* の「包含」(あるいは「中」) という意味はモノ的な概念ではなく、モノとモノとの間の位置関係すなわち様態に関係する概念である。前置詞の意味が Trajector と Landmark の位置関係及びそれらの様態と密接に関連することは事実であるが、様態と前置詞固有の意味とは明確に区別すべきである。

さて、(14)の例に立ち返る。そこで述べたようにこの例は場所的な位置関係ではなく、属性あるいは状態を表している。場所的な位置関係ではないとすると、上で述べたことから、それと不可欠に関連する部分的な概念を必要としないという想定が可能である。事実(14)を見ると(a)の *at school* では、無冠詞であることから明らかなように、建物としての「学校」ではなく、「勉強している」という学校の機能的な側面がいわば前景化している。(b)の *on holiday* ではそもそも場所の意味はない¹⁰。さらに、(c)の *in hospital* では(a)と同様に病院の機能的な側面が前景化されている。このように考えると、場所を表すか状態あるいは属性を表すかの相違は部分の含意が存在するか否かによると言える。

5 非場所的前置詞 *for, from, by; to, of, with*

これに対して同じ単音節の前置詞すなわち *for, from, by; to, of, with* を考えてみる。(11)のフレーム文に対応する以下の例を見てみよう。

- (17) a. Her first responsibility was to the children, she acknowledged with a sigh.
- b. This vote was of the utmost significance.
- c. The girl was *with the children*.
- d. He maintained that the death of Christ was for the sins of

10 前置詞 *on* が場所の意味から時間の意味へ比喩的に発展したという考え方も可能であるが、時間の意味で *on* が用いられるのは名詞 *day* が後続する(と考えられる)場合に限られるようである。他に *every hour on the hour/on the occasion* などいくつか未解決の問題はある。

- all men against the first covenant.
 e. Clare's cry was from the heart.
 f. Ruth was *by the window*.

—以上 BNC

既に場所的な表現では前置詞の目的語と密接に関連する部分の概念が強く関わっていることをみた。しかし、(18)の下線を付した目的語ではいずれも場所的な部分概念が存在せず、いわばモノそのものを問題としていることに注意すべきである。但し、(18c, e, f)の *with*, *from*, *by* の例は興味深い。これらはいずれも場所的な表現といわざるを得ない。しかしそこには場所的な概念として必須であるところの「部分」の概念は存在せず、モノそれ自体を全体として認識していることになる。

6 結論と示唆

以上の観察から場所的な前置詞 *at*, *on*, *in* と非場所的な前置詞 *to*, *of*, *with*; *for*, *from*, *by* との相違は前者に部分的な概念が含まれるのに対して、後者にはそれがないという相違が存在することとなる。最後に次例を考えてみよう。

- (18) a. the man at the supermarket
 b. the man on the train
 c. the man in the room

上ではいずれも *the man* と前置詞の目的語との位置関係言い換えると中立的な存在関係を表しているが、注意すべきことは、その限りにおいて *at*, *on*, *in* の間に意味的な相違はないということである。それではなぜ *at*, *on*, *in* の相違があるのであろうか。それぞれ異なる前置詞が用いられている要

因は前置詞固有の意味と後続の目的語との関係にあると考えられる。(a)の *supermarket* は *at* により「点」として捉えられ (Herskovits (1986) 参照), (b)の *on* は「路線」が考えられる (中右 (2004) 参照)。特に後者での *on* の使用は「バスの床」ではなく、＜面＞と同様二次元的なく線＞によって動機づけられていると考えられる。¹¹ (c)の *in* は文字通り病院の内部である。しかしこのことが *in* の意味が＜中＞となるわけではない。和田 (2005) で論じたように＜中＞は前提としてその外枠とでも言うべき＜形＞の概念が必須である (上述の *in lamb* を参照)。従って *at*, *on*, *in* は＜点＞＜線／面＞＜形＞をそれぞれの語彙的意味として持ち、これが後続の目的語の部分的概念として機能することにより選択制約が生じることになる。

このように前置詞 *at*, *on*, *in* が後続の目的語と一定の意味的な関係によって結合されているとすると、先行の要素との間にはいかなる関係が存在しているのでしょうか。上で「中立的な存在関係」と述べたが、Herskovits はこれを「共存関係 ‘contingent’」と呼ぶ。その名称はともかくとして、ここで重要なことは、英語ではこの場所的な関係を形態素ではなく語順によって表していることである。すなわち英語は場所を表す文法的な手段は基本的には語順であり、従来想定されていたような前置詞が場所を表しているわけではないということになる。これは英語においては主語や目的語が語順によって示されるのと並行的である。¹²

これに対して *to*, *of*, *with*, *for*, *from*, *by* では、(17)からも明らかなように、これらの前置詞と後続の名詞目的語との間には何ら意味的な制約は保たれてはいない。むしろそのような意味的な制約はそれぞれの前置詞に先行する名詞 (等) とそれらの目的語との間に成立していると考えられる。それ以上に注目すべき点はこれらの前置詞が何らかの＜指向性＞を有する点であ

11 従ってここでの *on* は「列車」が「路線」のメトニミーとして機能していることになる。前置詞 *on* にはこのような用法が多い。また Fukui (2005) は *on* について興味ある分析をしている。

12 このように形態素によらず表現される関係概念としては *John peeled Mary an apple* のような所有関係も考えられる。詳しくは Wada (2001) を参照されたい。

る。＜指向性＞であることから「AからBへ向かう」のか「BからAへ向かう」のか、それともそのような＜指向性＞がないのかという3種類の認識的区別は十分考えられることである（この場合部分概念が存在しないことに注意）。事実、これらの意味的な関係は従来 Allative, Ablative, Comitative と呼ばれ（Anderson 1997, 2006等参照）、英語では *to*, *of*, *with* がそれぞれ対応している。¹³

最後にこの＜指向性＞は通常の語彙が有する意味とは本質的に異なるレベルの意味であることに注意する必要がある。＜指向性＞は場所的な概念と同様に二つの Entity（あるいは語と語）との間に成立する原初的かつ有限の関係概念であり、これらパラメタの値によって言語の具現化が決定されることが考えられる。前置詞 *to*, *of*, *with* は, *at*, *on*, *in* とは異なり、関係概念そのものを語彙化している可能性がある。

REFERENCES

- Anderson, J.M. 1997. *A notional theory of syntactic categories*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2006. *Modern Grammars of Case*. Oxford: Oxford University Press.
- Dirven, René. 1993. "Diving up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions." In Zelinsky-Wibbelt ed. 1993: 73-97.
- Fukui, Miwa. 2006. On the two meanings of ON: "Contact" and "Unboundedness". MA Thesis, Kobe City University of Foreign Studies.
- Herskovits, A. 1986. *Language and spatial cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. D. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jaworska, E. 1986. "Prepositional phrases as subjects and objects." *JL*

13 *For*, *from*, *by* もその可能性があるが、これらが *to*, *of*, *with* とどのように異なるのかについては改めて考える必要がある。

22 : 355-374.

- Langacker, R. W. 1992. "The symbolic nature of cognitive grammar: The meaning of of and of of-periphrasis." In M. Pütz ed. *Thirty years of linguistic evolution*. 1996: 483-502.
- 中右 実. 2004. 「言語と認知と文化のインターフェイス」『英語青年』第150巻 第6号 (9月号) pp. 20-24.
- Pütz, M. and R. Dirven eds. 1996. *The construal of space in language and thought*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik eds. 1985. *A comprehensive grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rauh, G. ed. 1991. *Approaches to prepositions*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics, vol. 1*. Cambridge: MIT.
- 和田四郎. 1998. 「点としての at」『現代英語の語法と文法』 pp. 231-239. 東京: 大修館.
- Wada, S. 2001. "A note on the relational nature of possession." In *The Kobe City University Journal* 52, 2: 1-13.
- . 2002. "Possession and selection of prepositions." In *The Kobe City University Journal* 53, 3: 7-29.
- 和田四郎. 2005. 「Teach-in の文法」田中実・神崎高明共編『英語語法文法研究の新展開』pp.141-146. 東京: 英宝社.
- Wada, S. (to appear) "'Usage-based' approach to English prepositions—with special reference to semantic and syntactic differences between *to* and *in*." In *Proceedings in 23rd Scandinavian Conference of Linguistics*.
- Zelinsky-Wibbelt, Cornelia ed. 1993. *The semantics of prepositions: From mental processing to natural language processing*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.